

戯曲 「草の家」 守安 久二子

● 舞台

平成後半の地方都市。昭和からの市町村合併により、政令指定都市となったが、昔からの独自の街並み文化・伝統が根強く残る町。武家屋敷跡や紅葉の美しい庭園を町内に保有し、同県内からの観光客もまばらに訪れる。

旧商家の門構えのまま残る「藤井計機商店」。

通称「はかりや」の藤井家。通りから商店の間口を経て、つなぎ間と奥に台所、居間と仏間、仏間の奥に離れがある。

本家跡取りである男4人兄弟の長男、悟志が、胃ガンで二年前に急死している。

季節は春。今年の夏は、その三回忌が執り行われる。

● 登場人物

藤井 陽（ハル）六十七歳

長男悟志に嫁いだ。

悟志亡き後、義母の芳と広い旧家に暮らす。

趣味は短歌。（会話にのみ登場）

藤井 悟志（サトシ）

藤井家長男。享年 六十七歳

藤井 芳（ヨシ）八十九歳

「藤井計機」通称はかりやを守り、悟志たち四人の息子を産み育てた。

藤井 浩次（コウジ）六十八歳

次男。東京在住。社長をしていた。

悟志亡き後、藤井の家督を継がなくてはと気持ちちが逸っている。

藤井 昌枝（マサエ）六十五歳

浩次の妻。同郷の浩次と見合結婚。

藤井 幸雄（サチオ）六十三歳

三男。独身。関西で大学教授をしていた。

趣味は自転車。関西弁もどき。

藤井 靖（ヤスシ）五十九歳

四男。地元で就職。この春定年を迎える。
実家に車で二十分程の場所に住む。

藤井 恭子（キョウコ）五十八歳

靖の妻。（会話にのみ登場）

藤井 翔一郎（ショウイチロウ）三十八歳

陽の一人息子。警察官。県内の転勤族。

藤井 光子（ミツコ）三十五才

翔一郎の妻。専業主婦。

藤井 孝（タカシ）七歳

翔一郎の一人息子。

常備薬の訪問販売員

二か月毎に、やってきては、陽から少額な売上を上げる。

● プロローグ

一昨年、藤井家の長男で陽の夫、悟志が胃がんで急逝した。

陽が嫁いだ当時は七人の大家族で、義弟はまだ学生だった。測量器機の小売りや修理をしていた「藤井計機」通称「はかりや」の切盛りは、晩年病弱な義父に代わり、気丈な姑の芳がしていた。そこは時代に取り残されたほぼ開店休業の商店だった。

今、陽をこの家に繋いでいた悟志と一人息子の翔一郎は居なくなり、芳と二人だけが住んでいる。

季節は春。ある日、陽は、体の異変に気づき一人病院に向かう。足が異様にむくんできたのが気になったのだ。

近所にある難波医院に行くことは、芳には言わずに来た。芳には戦時中、腸チフスにかかった長女を難波医院の先代に殺されたと近所に吹聴してきた過去がある。

咳もあつたことから、医者には風邪薬を処方して結果を薬のきれる4日後に、聞きに来いと言った。ところがその日の夕方、医者からの電話で「ご家族」の人を出してくれと言われる。何事かと驚く陽。家族は居るには居るが、家には、私と年寄りだけだと伝える。口ごもる医者。貧血がひどいので、大きい病院での検査が必要、行く病院を決めて紹介状を書くから「ご家族」と取りに来てください。お子さんは？

陽は、「ご家族」と言われ、一瞬頭の中に靄かかったような気がした。自分にとって「ご家族」とは、いったい誰なんだろう。医者

は、私のことについて、私に言えないことを言う相手を連れて来いと言っている。それもできるだけ早く。

そう言えば、自分は、この家に嫁いであら常に、誰かしらの「ご家族」だったように思う。夫や息子、姑や舅、その息子達の「ご家族」であり続けた。悟志の弟たちが家を出て、家庭を持った後も、毎年盆暮れ正月は、皆家族連れで帰省してきた。

それぞれの都会での愚痴に傾きながら、ずっと絶え間なく家事をし続けることで、陽は藤井の「ご家族」であり続けた。しかし、今の陽にとっての「ご家族」は、どこにいるのかわからない。唯一の同居人である芳では決してない。離れて暮らす息子しか、医者という「ご家族」は今の陽にはいない気がした。

陽が入院した週明けに浩次夫婦が、帰郷してきた。悟志が死んでから、何かと芳を気にして帰ってくる。病気のことはまだ翔一郎しか知らない。

陽の入院をきっかけに、残された男兄弟（元会社社長の次男の浩次、元大学教授の三男の幸雄、地元にいる四男の靖）が集まる。この夏には長男悟志の三回忌を控えている。

年老いた芳とバランスを崩した「ご家族」達。家を出た人達が思うふるさとの現実、覆い繁り枯れていく草の家。

陽が、必死に根付こうと守ってきたこの家は、草に覆われ姿の見えない家だった。

● 第一場（五月半）

縁側の見える居間と奥に仏間、台所と板の間挟んで古い店先。

居間、終わりがけの食事を前に、座ったまま舟を漕ぎだした芳。

店先の土間、上がり框。

昌枝 いやあ、そんなこと言われても、困るわあ。

薬屋 ホント、毎年こちらの奥さんには、喜んで頂いてて。

昌枝 でもねえ、私じゃよくわからないのよ、また今度にしてくれる？

薬屋 それが今月の限定商品で、奥さんの話じゃお母様が大好きで買わないと機嫌悪いって聞きましたけど、それで頑張ってる日。

昌枝 でも、そんな、困るわあ。

薬屋 一本だけでもホント、元気になりますから。

浩次、店先に顔を出す。

浩次 おい、いつまでやっとなや、なにごとや。

昌枝（溜息）リンゴ酢ですって。

浩次 押し売りか。

薬屋 いやいや、私ども、黄色い薬箱のココ薬品と申しまして、テレビでもおなじみのあの常備薬の、

昌枝 一本三千円ですって。

浩次 はっ？ たけえーわ。

薬屋 いつも、この季節は、こちらの奥様から頼まれてて。

浩次 知らんわ、そんなん。

薬屋 さっぱりして飲みやすいんです。

浩次 二百円や三百円ならともかく、三千円って、ぼったくりか。

薬屋 いやいや、またそんな。私どもココ薬品は、

昌枝 だからココ薬品は、知ってるけど、さっきから言ってるように、私らここに、いるわけじゃないのよ。お義姉さん、今いないから。ねえ、私ら昨日帰ったばかりで。

薬屋 帰ったって、どこからですか？

昌枝 東京。

薬屋 東京！ いや、こちらに、お住まいじゃないんですか？

僕、てつきり。

浩次 なんな、

薬屋 こちらに、移って来られたんだとばかり。

浩次 なんで、

薬屋 てつきり、お姿が、いや、はは、くつろがれてるんで、は。

浩次 わしが都会暮らししてんのは、見たらわかるだろう。洗練されとるが。ステテコはステテコでも、東京のステテコだぞ。

昌枝 やあねえ、恥ずかしい。こつち帰ると、こうだからねえ。や

つぱり、気がぬけるんでしょうかねえ。

薬屋 いやあ、実は、さつきから、心配してたんですよ。いつもの

奥さんどうしちゃたんだろうって。

昌枝 ねえ、お義母さんなら、わかるかしら。

浩次 (奥に向かつて) おばあさん! おばあさん!

薬屋 あ、お母さま、いらっしゃるんですね。お元氣されてます?

浩次 おう。

昌枝 三千円はちよつとねえ。

店の前を近所の人が通りかかつて外に向かつて会釈する昌枝、慌てて店のガラス戸を閉めに降りる。

浩次 あほか。閉めとけ。おい、もう帰ってもらえ、入るぞ。

薬屋 あつ、あ、そういえば、この前伺った時、お客さん見ました。

昌枝 まあ。

浩次 はあ? なんな。

薬屋 あ、いや、めずらしいなあって。

浩次 おい、何言うとん、その看板読んでみい。

薬屋 はい、すいません。読ませていただきます「藤井計機商店」失礼いたしました。

浩次 れっきとした商店だ。ここは。

薬屋 いやあ、何年も来させてもらってるけど、初めてでした。お客さん見たの。

浩次 ふん。

昌枝 そうよね、あたしもここ十年以上? 見たことないもん。

薬屋 なんでも、水銀の体温計を探されてて。

昌枝 へえ。

薬屋 ドラッグストアにないんだそうです。製造中止みたいですよ。知り合いの方に、ここならあるんじゃないかって聞いたみたいで。

昌枝 すごーい。そういう方もいるのねえ。

薬屋 なんか、ピピって、ねえ、あの、デジタルのは、信用できないって言っていました。

昌枝 でも、わかるわあ、最近じゃ肌に当てないのもあるのよ。

浩次 そんで、ウチには、あったんか。

薬屋 奥さん、その棚の奥から出しましたよ。

(腕を面白おかしく振りながら)

こう、こう、下げる時ふるんが、こう、しましたよね、こう、良いそうです。

浩次、雲の巣をはらうように、並んでいる古い棚の扉を開けて、中から、それらしき小箱を手に取る。

薬屋 結構、黄ばんでますね、はは。

浩次 ここはな、人も店も、もう重要文化財になつとるからな。お

い、こんなん売って大丈夫なんかな。

薬屋 奥さん、お金はいいって、あげてましたよ。わざわざ来てく

れたんだから、どうぞどうぞって。はは。

浩次 なんやそれ、どっちが客かわからんが。

薬屋 ホントに。いやいや、(笑いだす)

浩次 どうしたんなら。

薬屋 いやー、その時、そこ空けたら、中にこんな、こんな立派な
へびの抜け殻があつて。

昌枝 えー。

浩次 ほう、そりや、長いこと開けとらんけ。

薬屋 開けた時、あつて、言うんですよ。だから覗いたら、僕、

本当のへびに見えて、思わずギャーって。もう、みんなに大
笑いされて。

昌枝 ふふふ。

浩次 情けないのう。大の男が。

薬屋 でも、そのへび、ここに居たつてことですよ。その棚に。

昌枝 あーやめて。

薬屋 それで、奥さんがそーっと。皮。破らないように、こう、は
がして、取って。ええ。

昌枝 そうよ。あれは、ほら、縁起がいいのよ。お金が。

薬屋 はい、お金が貯まるって、お客さんが喜んで持って帰られま
した。財布に入れるって。

昌枝 おいくつぐらいの方？

薬屋 さあ、ご一緒ぐらいですかねえ、ご夫婦でしたね。そした

ら、へびの抜け殻代だつて、お金払って帰りました。その
方。

昌枝 まあ、いいお客さん。

薬屋 はい、そうですよね。ふふ、でこちらも、どうか。はい。

(上目使い) お願いします。

昌枝 え？ やだ。

浩次 まんまと乗せられてるが。

薬屋 いやいや。それ以外にも、えっと、それとか、ビーカー？で
すか？ その試験管と台も部屋に飾るって買つてました
よ。

昌枝 なるほどねえ、そういう楽しみ方あるのねえ。

薬屋 確かに、そう言われてみれば、おしやれですよ。使い方に
よつては。えー、このお店とかも、雰囲気ありますしねえ。

浩次 おう、だいぶ傾いてるがな。もうこんなボロボロになつてし
もうて。子供んころは、広く感じたけどなあ。しょっちゅう
人が来てて。

薬屋 へえ、そうなんですかあ。

浩次 上の葡萄農家やらが、農薬するのに天秤で薬品、温室の温度
計買いにきたり箱詰めするのに台秤の注文がきたりのう。病
院とかにも、定期的に、こんなもん配達しとった。トラック
の荷台に乗せてもらうんがうれしゅうて喜んで付いて行つた
わ。おやじがまだ元気だったからなあ。

薬屋 へえ。

浩次 おやじは、修理の資格も持ったから川元の工場へもよう行きよった。すだれ工場があつてなあ、おもしれえんじや、機械から、ストローみたいなんが、びゅびゅびゅ出てくるんよ、そりや、夢中になるが子供は。ここに居ったら退屈することなかつたけどなあ。

間

薬屋 あ。

浩次 はあ、もう。(溜息の後、奥に向かつて) かあさんって!

薬屋 この季節限定なんですよ。お好きな濃さに薄めてもらつて。ホント、疲れ取れますから。

昌枝 でも、私らじや。

浩次 いけんわ、ばあさん、また耳聞こえんなつとる。

薬屋 耳にも効きます。

浩次 いいかげんなこというな!

薬屋 はは、すいません。でもほんと、毎年三本も、買っていただいて。

浩次 三本?

薬屋 ハイ、いつも。お母様? が好きだそうで。ありがたいことです。

浩次 三本てか。陽さん年金暮らしなのに、ようまあ。

昌枝 また、嫌味言われてたんじやない? なんも買うてくれんじやなんだ。

浩次 ああ、もう、いい。わかった。めんどくさいから、三本。わし、買うちやるわ。おい、財布。

昌枝 ちよつと。

薬屋 わー、ありがとうございます!

昌枝 一本だけにしたら? ねえ。

浩次 いいから。財布! どうせ、他のもんも飲むじやろ。

薬屋 あ、そうですね。そうですね、ご主人。負けてられませんよ、なんだったら、四本にします? とか、言ったりして。

浩次 ほん?

薬屋 いや、冗談です。嘘です嘘。

浩次 わしもな、金だけはなあ、あるんよ。困ったことにな。

薬屋 あ、もしかして、そちらのお財布にも、ヘビの皮が入ってるんじゃないですかあ?

浩次 (財布を覗きながら) おう、なんやかや、入つとるぞ。病院の診察券、請求書。ようけ入つとる。何でも来いじや。

薬屋 じゃ、ケースごといきましよう。って、いやいや。

昌枝 あなた、若いのに、達者ねえ。驚くわ。

薬屋 はは、これも、仕事なんで、スイマセン。

(お金と商品の受け渡し)

ハイ、ホント、ありがとうございます。

浩次 どうせ、余計な金じや。

薬屋 いや、いや、またあ。また、二か月後に、参りますんで。次も、お薬の補充させていただきます。本当に、お疲れのところありがとうございます。

浩次 おお、ほんとに疲れた。もう、こんでええから。

薬屋 またまたあ。あの、今日は、お会いできませんでしたけど、

奥様とお母さまにもどうぞ、くれぐれもよろしくお伝えください。

浩次 ほん。

薬屋 はい、じゃ、失礼しまあす。ありがとうございましたあ。

居間へ移る二人。

三本のリンゴ酢ドリンクのパックを台所へ運ぶ昌枝。

浩次 おばあさん！

終わりの食事、座卓の前で、うとうとしていた芳。座って、食卓にあったビールを飲む浩次。

芳 はあ、どしたん？ 客か？

浩次 薬屋。(昌枝に) おい、冷えてるんくれ。

芳 薬？ はあ、もう飲んだらう。さつき、たしか、

浩次 じゃのうて、陽さんが頼んどるやつ。

芳 ああ、あれ、きた？ あん富山の。

浩次 おい、あいつ、富山から来とんか。

昌枝 まさか。本社が富山なんじゃないの？

浩次 ほん。

芳 ありやあ、富山の薬売りじゃ。あん若い男の子じゃろ？ 髪

がこげな。(髪をたてる仕草)

浩次 ほん、調子のいい奴じゃ陽さん騙されとるは。ようけ、買うとる。

芳 ほう、そうかな。若い男には、いいんよ。あん人。

フ・フ・フって、どこの娘さんかあ思うような声で笑いよる。

浩次 ほお。(苦笑い)

芳 あたしら、いつもあんな声、出してもろうたことがねえ。

昌枝 ふふ、ほら、お義母さん。リンゴ酢ですよ。

芳 ほお、ああ、あれ、これ、きたんか。

浩次 うまいん？

芳 ほん、好きなんよ。ここが(喉をさすって)ここが、さつぱりする。

浩次 へえ。ほんまか。ほんならええが。わし、買うちゃったけえ。

芳 ありがと。陽ちゃん、たまにしか、買うてくれんの。

浩次 この季節だけなんだと。三本あるけえ。しつかり飲み。

芳 あれまあ、そんなに、ありがとねえ。浩次がおってくれると、楽しみがええわ。

昌枝 この人が、お義母さんが飲むだらうって。

浩次 一本 三千円だと。

芳 ほう、そんなにするん。高いんじやなあ。知らなかった。

浩次 わし、金はあるんよ。使い道がわからんのよ。困ったもんじや。

昌枝 この人、いつもこんなことばかり言つて。

芳 ほうかな、そんなにあるんかな。

浩次 ありすぎてな、困つとんよ。北朝鮮でも買うちやろうかしらん。

芳 そりゃあ、まあ、大きくでたのう。

なごやかな三人の笑い声。

電話が鳴る。傍に居た芳がよつこらしよと出ようとする。慌てたかんじで受話器を取る浩次。

浩次 もおし、翔坊？ おうう、わしじや。うん、した。ばあさん

から聞いて、うん。どうなつ、うん、そう、驚いたわ。え

つ、ほう……（溜息）ほう。そうかあ。えらいまた。うん、

おう、そうじや、ばあさん怒つとるし、おう、まあわかる、

おう、わしから。うん……うん、わかった。まあ、大変じや

けど、あまり無理すんなよ。明日、わしらも、国立病院行つ

てみるは。うん、こつちのことは、うん、そうじやな、……

そうか、わかった。ん、じや。

芳 （昌枝に）翔ちゃん、翔ちゃんじや。（黙つてうなづく昌枝）

受話器を置き再びビールを飲む浩次。

少しの沈黙。

昌枝 で、どうつて？

芳 翔ちゃんじやろ？ なんて？ 陽ちゃん。

浩次 あんな、おばあさん。あんなあ……しつかり聞きよ。

昌枝 何？

芳 陽ちゃんじやろ？

浩次 うん

芳 なんて？ 死ぬるん？

昌枝 やだ。

浩次 あんなあ……白血病らしいわ。

昌枝 えっ！

芳 はあ？

昌枝 なんで？

浩次 知らんわ。

芳 なんでまた、

浩次 わしに聞かれても、知らんて。詳しい検査、これかららし

い。

芳 白血病。

昌枝 それつて、確かなの？

浩次 らしいわ。

昌枝 いつから？

浩次 本人は、ずっとだるかったらしいは。たまたました血液検査

でわかったらしい。

昌枝 手術とかするの？

浩次 まだ、わからん。血液の癌ってやつよな。

芳 えらかったんじやろうか。

浩次 たぶんなあ。

芳 ……少し前、あん人、足が膨れて、困った。

浩次 そうか。

芳 庭にな、ネギとりいこう、そんな時、サンダルが、いいように

履けんで。

浩次 ふーん。

芳 えらかったんじやろうか。

浩次 風邪か思えて、いった難波の検査でわかったらしいわ。

芳 難波ってあの難波か。

昌枝 今は、国立でしょ。

浩次 お、明日、行くぞ。

昌枝 翔ちゃんは？

浩次 病院で会う。

芳 ……なんも言わんで。

昌枝 え、信じられない、ショック。

浩次 おばあさん、取り合えずな、詳しいことなんもわからんか

ら、むしろ、明日、国立行ってみるは。また、色々わかった

ら、教えるけえ。本人は、しっかりしとるらしい。翔一郎が

言っとった。

芳 翔ちゃんがや。

浩次 来週、なんでも赤十字の大会に皇室が来るらしい、その警

備に駆り出されてめちやくちや忙しいらしい。

昌枝 あらあ、お巡りさん大変だ。

浩次 しょうがねえが。

昌枝 この間、お兄さん逝って。お義姉さん、あーショック。

浩次 そりゃあ、みんなショックじゃ。

芳 ……どうしたら、いいんよ。

浩次 なんか。

芳 隣の須西^{すさい}の嫁が、

浩次 でしたん。

芳 入院は、私のせいじゃて。

浩次 はあ？

昌枝 なんて、そんな。

芳 ふざけとるんよ。昔からあん嫁は。

浩次 なんて、そんなことになんかなあ。

昌枝 それでも、なんか、お義姉さん、なんか、あったでしょうに。

何日か前、帰るって電話した時、そんなこと何にも言っ

かったのよ。いつも通りで、普通に。

浩次 そうだなあ。陽さんなんか言うとった？

芳 いやあ、あん人は、昔っからじゃ。大事なことは、なんも言

わん。なんも言わんで。悟志ん時も。

浩次 そんなことはなからう。

芳 いいよダメになってやっつよ。最初はできもんが見つかったから切る言うて。

浩次 まあな、いろいろじゃから。本人が一番驚いとしんじやから。翔ちゃんも、急に病院連れて行ってくて来て、それっきり。そのまんま、入院で。

昌枝 じゃあ、お義姉さんも、入院するつもりなんて。

芳 翔ちゃんも、後で後で。まだ、わからんからって。

浩次 兄貴逝って、これからいろいろなあ。

昌枝 治るんではよ？

浩次 じゃけ、わからんて。色々、種類があるらしいわ。同じ、白血病でも。

昌枝 急性は、ダメだつて聞いたことある。でも、渡辺謙とか治ってるんじゃない？ ねえ。

芳 助からんのじゃろうか。

昌枝 一人になって、やっとこれから楽しめたのに。急性だった

ら、無理みたいよ。ねえ。

浩次 じゃから、今ここであれこれ言ってもはじまらんから。

何べんも言わすな！

沈黙

芳 (つぶやくように) あん人は、ほんま何もいわんで。

浩次 おい、わし、風呂入るぞ。(立ち上がる)

芳 浩次。

浩次 ん？

芳 わたしやあ、ようせんよ。一人で世話やこ。

浩次 そんなこと、おばあさんが心配せんでも。翔一郎がおるが。あんたにもじき東京、戻るし。

昌枝 すぐ、来ますよ、夏には、お兄さんの三回忌もあるし。

浩次 まあ、明日にしようや。わし、もう、風呂入って、寝るぞ。

昌枝 そうね。

芳 こんな年寄り一人にしてから。

昌枝 え？

芳 どうせ、

浩次 あのな、かあさん、わし、風呂入ってニュース見にやおえんの。とりあえず明日、明日にしよう。おい。

芳 こんな家の跡取りは、何で、

昌枝 お義母さん、また、明日にしましょう。お先にお風呂どうぞ。

芳 いんや、これから拝ませて、もらいますから。

浩次 ほん、ほんなら、わたしは、先に休みます。よ。

芳 はい、どうぞ。

昌枝 あなた、

浩次 着替え、風呂場、置いといてくれ。

昌枝 いいの？

顔の前で、小さく手を振り、浩次奥へ去る。

一人、仏壇の前にすわる芳。

手をあわせ、ぶつぶつお経を唱える。

おりんの音。

芳

悟志さん、私やあ困るが、こんなおばあさん一人にさせん
よ。頼みます。頼みます。

お守り下さい。南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛……。

台所で洗い物を終えた昌枝も去る。

仏壇の前の芳。

おりんと数珠の音。

● 第二場（翌日 午後）

台所、慣れたかんじで、冷蔵庫から缶ビールをだして飲みほす靖。手に持った団扇で、扇ぎながら外の様子を伺う。手ぬぐいを被った芳が、絹さやを積んだかごを抱えて、縁側からよつこらしよと上がってくる。

芳 あれまあ、靖さん。どしたん。

靖 うん、まあ（芳の絹さやを見て）あー、

芳 絹さや。そりやええけど、

靖 みんな、恭子ん里、帰っとんよ。

あれ、また旦那ほったらかして、お乳吸いに行っとんか。まったく、そいでも、どしたん？ こんな時間に。仕事は？

靖 ざこちなく笑う靖。

浩次 浩次と昌枝がバタバタと上がって来る。

靖、慌てて、空き缶をゴミ箱に捨てる。

浩次 やれ、帰りました。帰ったよ。今日はまるで夏じゃ、暑かったあ。

昌枝 やっぱり、靖さんの方が早かったあ。あら、絹さや？ まあ

たくさんこと。

芳 あれ、あんたら、靖も一緒に行ってくれたん？ 休んだん？

靖 ああ まあ、ね。車は別だけど、行かせて頂きました。はい。

芳 そりやあ、まあご苦労さんでしたなあ、暑いのに。

芳と座卓を囲む靖と浩次。

団扇を探す浩次。

靖が電話台の下から、団扇を出し渡してやる。

てきばきとお茶を入れる昌枝。

芳、絹さやの処理をしたりしながら、

芳 あんた、浩次に聞いたん？（うなづく靖）

昌枝 やっぱり、疲れたね。

浩次 かあさん、まず最初に、靖に言わにやおえんが。

芳 はん？

浩次 靖が一番そばにいるんじゃから。電話したら、こいつなんも知らんて。

芳 そいでも、なかなか顔見えんで。

浩次 おばあさんが、末っ子で甘やかすから。親の面倒まで気が回らんよ。

昌枝 あら、あんまり来てないの？

芳 こん人も忙しいから。

浩次 車で二十分もかからんのに。何が忙しいじゃ。

靖 （うんざりして）私のことは、いいから。

芳 ふん、陽ちゃん、どんな？

浩次 おい昨日のあれ、出してみい、ばあさんの好きなやつ。

あんなあ、靖、お前が、もつと気を付けとちゃんと、いかなので、ほんまは。

靖 なんな、たまにきて、偉そうに。

浩次 えらいから言つとんじや。まったく、どいつもこいつも。幸

雄は幸雄で、フラフラ、夕べ電話したら今、鳥取砂丘だと。

おふくろ一人になつとんのに、すぐけー言つといた。

芳 あ、さっちゃんも帰つて来るん？

浩次 知らん、当てにならん。おっさんが一人、砂丘で何しとんの

や、言うたら、「カニと戯れてる」てぬかしやがった。

昌枝 え？ カニ？ 今？

靖 (苦笑い) たぶん「われ泣きぬれてカニと戯る」

昌枝 あー、握ればさらさらと、あれ？

浩次 あほか、ちやうは。

靖 もういいが。兄貴はいつもそう、今は、私たちのことより、陽

さんでしょ。

昌枝 やっぱり、白血病ですって。先生はつきりおっしゃった。

芳 ほう、やっぱりや。

靖 見た目は、変わらんのになあ。

芳 はあ、……治らんの？

浩次 あんな、はつきり言つて、治らない。あきらめろと。

芳 ほうん。

浩次 これから、抗がん剤と輸血でだましだまし行くらしい。延命

治療つてやつだ。

芳 輸血で、人ん血を入れるんか。

浩次 おう、今日もぶら下げとった。

芳 怖ろしい。

浩次 まあ、難しいらしいは。治るんは。

昌枝 明日から、抗がん剤の治療するって。あれはほら、副作用が

あるでしょう。しばらくは入院みたいですよ。

芳 そうかな。長くなるんじやな。

浩次 ああ、そりや治らんのじゃもん。

昌枝 すつこくはつきり言うお医者さん。お義姉さんの前で、ね

え。

浩次 今頃はあれが当たり前らしいは。陽さんも全部、わかつと

る。

芳 ふうん。

浩次 海老蔵、先代の、

芳 ほう。

浩次 海老蔵と同じ病氣じやて。

芳 ほうかな。

靖 ズケズケいっとたなあ。あの医者。

浩次 おう、しっかし、どうするかなあ。

昌枝 どうするって言つても。

芳 私も行った方がいいじやろか。見舞い。

靖 あ、いや。

昌枝 細菌感染が怖いって、ねえ。

靖 ああ、厳しかったなあ。

浩次 あのな、面会するんに、消毒されるは、マスクつけさせられるわ。

芳 ほお。

靖 母さんは、行かんほうがええんと違う？

芳 ほうか。

昌枝 お義姉さん、微熱があつて。あ、お義母さん、お義姉さんが出してる短歌会から、本届いてます？

芳 いんや、見とらん。

昌枝 え、そうですかあ。

芳 ほうか、行かんほうがええか。

昌枝 今月の分、来たら届けて欲しいって。

浩次 次行くもんが、便で持ってきやええが。そうだなあ。行かんほうがええかもなあ。(小声) かあさん行ったら、余計悪うなるかも知れん。ふふ。

昌枝が浩次の足をたたく。

芳 私もな、一人じやよう行かんし、足もこげなじゃしなあ。

靖 ええよ。行かんて。

芳 そうじゃなあ。

浩次 ほんまじや、これうめーが。

昌枝 さっぱりしますね。

浩次 かあさんも飲み、好きじゃろ。

芳 ほん、ありがと。

昌枝 あら、

浩次 雨か。

ぼつぼつと、トタン屋根部分におちる雨。洗濯物を入れようと縁側へ降りる昌枝。

昌枝 ごはんにしましょうかね、靖さんも食べていく？

靖 いや、私はいいです。(かこの絹さやに目が行く)

昌枝 ふふ、食べていきなさいよ、おふくろの味。

浩次 あのなあ、靖、わしも、もう七十じゃあ。

靖 はあ。

芳 翔ちゃんには、会えたん？

浩次 いや、こん。もうなあ、しんどい。

芳 会えんかったん？

昌枝 (縁側から大声) なんか、仕事で無理だったみたいですよ。

電話が。なんか呼び出し、ほら、皇室が、来るから。

浩次 あのな、翔坊はな、わしらみたいな暇人じゃないけな。

芳 そうじゃなあ、忙しいわなあ。

浩次 お国を守ってもらわな、な。

芳 ほう、お国をなあ。

浩次 そいで、一所懸命働いて、わしらの年金払ってもらわにやおえん。

芳 はあ。

靖 私も年金は払ってますよ。国は守らんけど。

浩次 翔坊、ちゃんとやっとなかな？ ああいうところは、階級社会じゃから。あいつも兄貴と一緒に、気の小さいところあるしな。

靖 悟志さんは、なんで止めんかったんじやろ。こんな時代に。

浩次 帰ってくるんがうれしかったんじやろ。良かったんか、悪かったんか。そのうち、戦争にも駆り出されるぞ。

芳 なあ。

浩次 ん？

芳 陽ちゃん、どうなるん。

浩次 どうって

芳 せーでも、このままじゃったら、

雨の音強くなる。

昌枝 大変、二階の窓空いてた。

浩次 心配せんでも、大丈夫だから。

慌てて二階へ上がる昌枝。

なんとなしにみんなバタバタする。

浩次 おい、靖、車回しとけ濡れるぞ。

靖 いや、もう帰るは。

浩次 食って行つてやれよ、めし。恭子さんおらのじやろ？

靖 いや、(呼ぶ) かあさん。

気が付かず、一人仏壇に向かい手を合わせ今日の報告する芳。

靖が、あぐらをかいて座りその背後から団扇で扇いでやる。

芳 悟志さん、あんた、なんで、

(何かしらブツブツ嘆いている)

悟志の位牌を撫でる芳。

芳の背後から、軽く手を合わせて帰ろうとする靖。

浩次と目が合い、二人苦笑い。

靖 じゃ。

浩次 靖。

靖 ん？

浩次 お前、どうするつもりだ？

靖 何が。

浩次 何って、これからのこと。おふくろもこんなじやし。

靖 ……。

浩次 もう定年じやろ？

靖 どうもせんよ。別に。

浩次 次どっか行くんか？

靖 さあ。

浩次 おふくろ、一人になるかもしれんぞ。

靖 まだ、わからんが。

浩次 なんか考えが、あるんか。

靖 考えって？

浩次 お前が、一番可愛いかっただろうからな、おふくろは。

靖 なん、知らないよ、そんな関係ないだろ。

浩次 お前の家、もう、ローン済んだんか？

靖 は？

浩次 お前が一番近いしな。この家、そうは言ってもここらじゃ

な、旧家じゃし。知らんもんおらんからな。

靖 ……まあ、そうねえ。

浩次 わしもな、考えるんよ。悟志さん死んでな。幸雄も頭はええ

んかも知れんが、大学黙ってやめて、自転車で、日本中うろ

うろ。

靖 あの人は、自由じゃから、家族もおらんし。

浩次 東京もなあ、

靖 (あきれたように溜息) 兄貴が帰ってくればいいが、帰った

いんなら。かあさんも喜ぶんと違う？ どうせ、二束三文だ

ろ、こんな家、売れても。

浩次 ……。

靖 まあ、売れる訳ないけどな。

浩次 売るやこ、ばあさんの前で言うなよ。

靖 それでも、誰も住まん家置いててもしょうがないよ。

浩次 ……。

靖 もし売れたら、そんな時決めればいいが。家は、兄貴んこと

違って、下はまだ金かかるからな。楽じゃないです。

浩次 そうか。

靖 あなたたちと違って、定年になっても、私らまだ年金でない

し。

店のガラス戸が開く音。

チャリダー容姿の幸雄。

ヘルメットやウェアが黒く光っている。日に焼けて満面の笑

みで、ロードバイクと一緒に入ってくる。

幸雄 すみませーん、この天秤ばかりくださーい。

驚く浩次と靖。

階段からバタバタ降りてきた昌枝。

昌枝 あらあ、さっちゃん！

幸雄、ロードバイクを入れながら商号の看板を見やり、

靖 いやあ、わが町ふるさと「藤井計機」は健在なりや。

わあ、最近この辺でもよくみるわあ、こういう恰好したおじ

さん。

17

幸雄 オーマイブラザー。はかりやの三男坊が帰って参りました。

浩次 なんな、コオロギみてえな恰好して。このあんごうが！ 今

頃のこのこ、買え！ 天秤ばかり、一億で売っちゃう。

靖 （大笑いしながら） かあさん、幸兄、のお戻りですよ。

幸雄 かあさん、ただいまあ。

思うように動かない体をひねって幸雄の方を見ようとする
芳、悟志の位牌は、離さない。

浩次 おせーわ。わしや、ほんま、でかいコオロギが入ってきたん
かと思うた。

幸雄 ああ？ まあ、しゃあないけど。

靖 コオロギじゃなくて、カニと戯れてたんでしよう。

幸雄 そう、

鳥取の砂丘の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたはむる。

昌枝 へえ、それで？ 握ればさらさら、だっけ。じつと手を見て

たの？

幸雄 はは、それはまた、別の歌。

浩次 ったく。

悟志の位牌を持ったまま、立とうとしてよろける芳。
駆け寄る幸雄。

芳 さっちゃん！ よう、まあ、元気しよったん？ よう焼け

て、まあ。

幸雄 はい、この通り。かあさん、また少し小さくなったんちゃ

う？

芳 まあ、みんな戻ってくれて、なあ、悟志さん。

幸雄 髪切った？ なんか、おじいさんみたいになつて。

芳 ほう？ ほうかい、そりや、困ったのう。さっちゃんが元氣
で、戻りました。悟志さん、ありがとう。おかげがありまし
た。

幸雄 かあさん。悟志兄さんは、はい、とりあえず、

芳の手から位牌をとり、仏壇に戻し

幸雄 まずは生きてる人からや、大事にせんとね。陽さん、大変や
な。

芳 ほん、ほんとになあ、私しゃあなんも（幸雄に抱き着かんば
かりに触りまくり）あれ、こんなに濡れて、雨におうたん？

幸雄 汗と雨、両方、吉備路から作山超えたところでちょうど。

浩次 鳥取砂丘から、チャリできたんか。

幸雄 すぐ来いって言ったやん。

風邪ひいたらどうするん、お風呂、風呂沸かしてやって。ほ
ら、早よ、陽ちゃん！

昌枝 ……

芳 陽ちゃん！ じゃのうて、ほれ。

浩次 (昌枝に目配せ) おい。

靖 この人は、昌枝さん。かあさん、陽さんは病院。

幸雄 あー、いや、はいはい、ええつて。シャワーあびるは。ちゃんと着替えてくるから。待つて、ね。

奥へ行こうとする幸雄、呼び留める芳。

芳 さっちゃん！

幸雄 ん？

芳 絹さや。

幸雄 え？

芳 絹さやがな、ようけこと取れてな、ほれ。

幸雄 ああ、そんな季節やね。

芳 季節のもんじゃからな、卵とじな、しよう思うんよ。いりこんお汁、してな。

幸雄 う、うん、そうね、ありがとう。はは。(奥へ向かおうとする)

芳 (幸雄がもう行ったと思って昌枝達に) あん人、黒うなつてあたしやあ、アフリカ人かあ思うたあ。

真面目に驚いている芳。顔を見合わせ笑う靖と昌枝。頭を掻く浩次。

ばつが悪い感じで荷物を抱え、風呂場へ消える幸雄。

芳 (急に思い立つて) 陽ちゃん、さわら！ さわらのお刺身買

うておいで、陽、じゃのうて

昌枝 昌枝です。

芳 (怒ったように) 誰でもよろしい、(財布を取り出し、昌枝に渡しながら) 背じやのうて、腹の方、その方が身がなあ、やわいから。地のもんが、ありやあええけど。モ貝もな、寿司にしてもいいし。

昌枝 え？ 私が行くんですか？

靖 あ、行きます、行きます。はい、はい (昌枝から財布を取って) やっぱり、刺し身は、さわらが一番、ついでにモ貝ね。

昌枝 ……。

浩次 おい、出るときに車入れ替えといってくれ。

投げられた車のキーをキャッチして、何故か嬉しそうに出て行く靖。

芳 なあ、さっちゃん、浩ちゃんが呼んでくれたんじやろう？

浩次 ああ、陽さんも心配じゃけど、かあさんもな。

芳 ほう、ほうなあ、ありがとう、ほんにあんたが居ってくれると楽しみがええわあ、ありがとうねえ。

やにさがる浩次。

芳、台所へ行こうとして戻り、

芳 畑へ行ってそんまんまじゃけなあ、ちーつと着替えてこーかな、髪でもといて、なあ、浩次さん、なあ、おじいさんに見えるん？

浩次 (バツが悪そうに) あ？ ああ。

芳 昌枝さん！ 悪いけど、お米洗うというてよお、いつもすまないねえ。東京からはるばる来られてんのに。わざわざ。すみませんねえ。ほんと。ご苦労様なことです。

昌枝 ……。

壁づたいに奥へ消える芳。

昌枝 もう、いや。(腹いせに水道の蛇口を思い切りひねる)

浩次 (冷蔵庫を開けながら) おい、ビールは？

昌枝 知りません。

浩次 冷やしとけ言うたろ？ いつも、わしんことは後回しじや。

昌枝 (何かしらぶつぶつ)

浩次 おい、聞いとんか。

蛇口を閉める昌枝。濡れた手を払って、

昌枝 だ、か、ら、自分で飲むビールぐらい自分でしてって言うてんのよ！ 私はあなたのおかあさんじゃありません。

浩次 な、

昌枝 東京から二ヶ月おきに、バカみたいにせつせと通って、家政婦みたいに使われて、こつちには私の親だっているのに今回

だってまだ顔も出してやれてない。あなただって、私の親に会いに行く気なんてさらさらない。ずーつと言ってるのに。

母が、具合悪いことは知ってるでしょう？ 兄さんとも大変だから帰った時ぐらい替わってあげたいのに。

浩次 ……。

昌枝 私にだって親はいるのよ！ ここから車で一時間足らずのところに私の年老いた両親がいるんです！

浩次 お、おう。

昌枝 蔵の戸開けたとこにケースで買ってますから、自分で入れてください。

気迫に押され、しずしずと勝手口から出て行く浩次。

昌枝 誰でもいいって、ふざけんじゃないわよ。

昌枝の怒りの米を研ぐ音。

● 第三場 (その夜)

暮れかけた居間。

酔っ払いの男兄弟三人が晩酌。

芳は座卓から台所へ行ったり、ごそごそして。

幸雄 かあさん、もうええよ。洗いもんもほっときやええんよ。だから、

「東海の小島の磯の白砂に我泣きぬれてカニとたはむる」もじった訳よ。陽さんのこと聞いて、なんか哀しくてなあ。

昔思ったら……。目の前には、広大な日本海、砂浜。

靖 だから、ピンとこないんだよ、普通のひとは。カニだけ聞いても。

浩次 わしは、啄木ってわかったぞ、あほくさって思ったけどな。

幸雄 そやけど、あの後、昌枝さんなんか、結局、あれカニ買ってこなかったの？ って。

浩次 冬でもねーのに、ある訳ねーが、ほんまに、あほうじゃけえ。

靖 あー、こんな話、陽さんが聞いたら一番喜ぶだろうな。なんせ表彰されて。(鴨居にかけてある表彰状楯を見上げて)

幸雄 あれも一番喜んだんは、悟志兄だったやん。送ってきたが、「草の家」。

浩次 草の家？

靖 陽さんの出した歌集の名。

浩次 ああ、悟志さんが、金出した、いう。

靖 僕らの前じゃ、けんかばっかりしとったけどな。あの二人。

幸雄 陽さんにだけはきつう当たってたな。悟志さん。

靖 ほんとになあ、ようわからなかったよな。あの二人。

幸雄 陽さんにメールしたんよ。久しぶりに。

驚く二人。

浩次 お前、陽さんとメールしたんか。

幸雄 うん。悟志さん死んでから。なんで？

靖 なんて？

幸雄 いや、同じ歌、我泣きぬれて、

浩次 なんだや。

幸雄 そやから、なんか哀しくて、お義姉さん、大丈夫ですかって。僕の心情を。

靖 したら？

幸雄 うん、まあ、幸雄さんは、変わらないねって。

靖 だから、なんだよ。

幸雄 だから？ まあ、よろしくって。

靖 は？

幸雄 あーこのさわら、うんめー。

台所から芳がお盆にのせた皿を運んできて、

芳 せいでも、あん人、急に消えてしもうて。
 浩次 縁起でもないことを。消えてりやせんが、入院中。
 幸雄 わー、ヌタしてくれたん。
 芳 ふん、アサリがあったけん。モ貝がありやあなあ。バラ寿司
 しても、えかったんじゃけど。せいでも、もうな、いいよう
 に力がな、一人じゃ混ぜれんのよ。
 靖 (小声) きつと昌枝さんのことじゃろ。
 浩次 (大声) 消えた言うんは、昌枝んこと？
 芳 ふん、居らんじゃろ？
 浩次 昌枝はな、何でも、倉田の母親がな、急に具合悪くなったん
 じゃて。
 芳 ほう、そうかな。倉田から、なんかゆうてきたん。
 浩次 知らんけど。
 幸雄 かあさん、おいしいなあ、ヌタ。
 芳 ほうかな、モ貝がのうてな。
 靖 もう、しょうがないじゃろ、何回も言わないでよ。無かった
 んだから。
 芳 ほうなあ、モ貝がありやあ、寿司してなあ、せっかく皆居る
 のに。
 靖 もう。(笑)
 幸雄 昌枝さんも、あっちもこっちも大変やね。
 浩次 あいつの兄貴が居るから心配はいらん。こっちほったらかし
 てから。
 芳 嫁さんが、みーんな居らんようになってしもうて。

幸雄 僕には、もともと居らんけどね。
 芳 そういやあ、そうじゃったなあ。(笑) 大学の先生でこんな男
 前なんに。
 浩次 もう、こいつは、大学首になつとんよ。ただのおっさん。
 芳 あれ？ ほう、なん？
 幸雄 そう、ただのおっさんです。(おどける素振り)
 芳 まあ、なんも聞いて、
 幸雄 一年前、やめた。悟志さん死んだ後。心配するから言わなん
 だ。
 浩次 全く、勝手なことしくさつて、誰のおかげで、今のところ潜り
 込めた。
 幸雄 自分のおかげ。
 浩次 はあ？ わしが、頼んで、うちの大阪の支社長からあんとき
 の学部長に口きいてやったからだろうが！
 幸雄 それは、あなたの一人よがり。
 浩次 断りもなしに、勝手に、やめて。こっちは、赤っ恥かいた
 わ。
 幸雄 あかね、兄貴、それ、ちゃうから。ずっと言いたかったけ
 ど、大石さんだろ、関係ないから、あの人そんな力ないか
 ら、ていうか逆に迷惑だったから。
 浩次 馬鹿かお前。
 幸雄 知ってる？ あの人、今、ゼネコンからの収賄容疑かけられ
 て、全くこっちもいい迷惑ですわ！
 浩次 何、どの口が。泣き言、言いよったんは誰なら。

芳 浩ちゃん、

幸雄 かあさんじゃろ！ 俺は何にも頼んでない！ だからやなん

よ、あんたと会うの。

浩次 あんたって、お前、

幸雄に掴みかかろうとする浩次。

靖が止める。

幸雄 あのね、悟志さんみたいな訳にはいかへんよ。次男坊が急に

長男風ふかしても、だめ。次男はずーっとただの次男坊！

にらみ合う二人。

小さくなる芳。

お酒が進む三人。

靖 まあ、でも、ねえ？

幸雄 ……何？

浩次 あんな、かあさん、

芳 ふん。

浩次 あんな、岩井の山上さん。

芳 ふん。

浩次 デイサービスにいつてるんじやと。

芳 ほう。

幸雄 だから？ 何？

浩次 だから、岸本の病院があるう？ あつこの隣、そんな施設が

できとるらしいは。きれいなんじやと。

芳 ふーん。

浩次 バスで、迎えに来てくれるんじやて。みんなで歌、歌うそう

な。

芳 ……。

浩次 一度行ってみるかな。好きじゃろ、歌うの。

幸雄 おい、今、そんな話やめえや。

浩次 陽さんわからんしな、一人こん家に居ってもさびしかろう？

芳 せいでも、

浩次 わしらが居るときに一度行ってみんかな。岸本クリニック。

幸雄 やめろって。

浩次 なん、お前はええわ、ゴキブリみたいな恰好して一人、ふら

ふら。

靖 (吹きだし) コオロギじゃないん。

幸雄 兄貴はいつつも、そうやって、急に陽さんおらんって、か

あさんの身にもなってみろ。

芳 さっちゃん。

浩次 ずーっとほったらかしといて、フラフラしとるくせに、居る

時だけえらそう言うな。

靖 は？ え？ 何、それ、

浩次 なんな。

靖 あんね、それ、こっちのセリフだわ！

浩次 はん？ お前、近くにおるのに全然顔出してねーくせして。
わしがどんだけ。
靖 あのね、ここは、あんただけのふるさとじゃないから。残念
ですけど。
浩次 どういう意味なら、おう？
靖 本当は、帰りたいんだろ、この家に！
幸雄 はあ？ そう。そうなんやあ。
靖 そう。東京じゃ子供らも寄り付かんし、昌枝さんもこつちに
実家があるし、陽さん居ないなら、何でも好きにできるし。
幸雄 へえ。
靖 それか、いつそ売っちゃえば？
幸雄 はあ？
芳 売る？
浩次 靖！
幸雄 ばーか売れるか、こんな田舎。
靖 いや、いや、誰も住まない、ならっていう、
浩次 売るつもりはない。
靖 ふーん、じゃあ、帰ってきて住めば？ 帰りたいんだろ？
浩次 （無視して、芳に）わしは、売ったりはせんから。
幸雄 ちよつと待てよ。この家は死んだ悟志兄さんのもんちやう
の？
靖 かあさん、この家の名義は今どうなっとんかな？
芳 あんたら、何て。（怒っている。）
幸雄 あほか、かあさん怒らして。

靖 いや、すぐにつて訳じゃなくて、
芳 すぐでも、後でも、そんな、人に売るやこ。
浩次 心配せんでも、わしがせんから、母屋は、悟志さんが建替
えしたんじやろうけど、店とか土地はまだ、じいさん名義じ
や。
幸雄 は、なるほどね。かあさん、施設に入れて、自分らが乗っ取
るんか。
浩次 何？ お前。
幸雄 あんたのやり口はいつもそう。ごさかしい。昔っから。
浩次、持っていた猪口の酒を幸雄の顔に浴びせる。
浩次 どういう意味なら、おう？ 言いたいことあんなら言ってみ
い。
幸雄、顔に掛かった酒をなぶって、じつと浩次を睨む。
二人の顔を見比べてにやつく靖。
幸雄 ああ、言ったるわ。ええか。自分がまだ、嫁さん居ないから
つて、弟の縁談つぶすか？ 普通。
靖 でた！
浩次 あんな、お前、言うけど、わし、そんなはことしとらん、
幸雄 いーや。
浩次 何で、わしが、そんなことせにやいけんのじゃ。

幸雄 妬ましかったんちゃうん？ 奨学金で大阪出て、大学院まで

行った弟が。ましてや、結婚まで先にされそうで、あること
ないこと。

浩次 わしがお前にやきもち焼いたつていうんか。ふざけるな。う
ぬぼれんもたいがいにせい！

浩次が、幸雄の胸ぐらを掴みにかかる。

振り払られて尻餅をつく浩次。
息をのむ芳。

靖 あら、あら、まあまあ。親の前で。

浩次に手を貸そうとするが、その手を邪険に払われる靖。

幸雄 すぐそうやって、都合が悪くなると、大声出したり、手出し

たり。自分、いくつじや思うとるん。そんなやり方もう通用
せんよ。

浩次 ほっとけ。

幸雄 あんたが手紙で相手の親に、自分の色弱のこと！ さも心配
してますみたなふりして、

浩次 そりや兄として、心配してな、お前らの子が女だったら、
幸雄 そんなタラレバの話、あんたに言われんでも、百も承知でし
た。

思い立ち、立ち上がる浩次。

浩次 (睨みつけて) 相手ん親は知らんかっただろうが。

高くか細い声をあげて泣き出す芳。

幸雄 あー、ちやうから、参った。

慌てる幸雄。

惘然とした浩次は、一人、店へ降りる。

靖 (その背に) あーあ、かあさん、泣かしたあー。

芳 さっちゃん、悪いんは、私じやから。

幸雄 ごめん、べつに、

芳をなだめる幸雄。

ようよう仏壇の前に座る芳。

浩次の様子を伺いながら、店に降りて行く幸雄。

板床のきしむ音。

間。

浩次は、埃をかぶった店の棚を手でなぞっている。

幸雄、店の柱を撫ではじめ、背を向けている浩次に、

幸雄 なあ。

浩次 ……。

幸雄 なあつて。

浩次 ……なんな。

幸雄 ……もし、この家倒すことになったら、そりや、もしもだけど……。

浩次 だから、なんな！

幸雄 もし、そんなことになるんなら、この柱、俺に切らせてくれ。

浩次 ……。

幸雄 積年の恨みを断ち切ってやんねん。

浩次 ……（深い溜息）おやじか。

幸雄 ああ、時々、夢に。

店にある扇風機を回し始める幸雄。
店の中をゆっくり見渡し、

幸雄 ここ、昼間は、好きだったけど、夜は、怖かったあ。

浩次 ……。

幸雄 大阪の家のこれが、ベッドに当たってキュキュゆうねん。寝てる間に蹴るんかな。

浩次 知るか。

幸雄 似てるんよ、悪さして、これに、縛りつけ、おやじが、縄占める音に。ふ、たまに、うなされて、目が覚める（自分自身にあきれて笑いがこみあげてくる）

浩次 （店にある黄ばんだ商品等をいじりながら）悟志さんもう縛られとった。

幸雄 ああ、俺のこととどばつちり、（笑）……あなたは、いつもうまいことすり抜けて……。

わずかに目が合い、口元が緩む二人。

浩次 あんな、苦労したんよ。わしも。今じゃから言うけど、今さらじゃけど。今、みたいに、個性じゃゆうてもらえる時代じ

やなかったからな。あんな、わしは、これ（目）が原因で、「日立」落とされたんじゃから。決まってたんじゃから、ホントは。

幸雄 ああ、知ってる。

浩次 そりや、言いうねーけど、今さらじゃけど、怨んだこともある。怨んだ、親をな。昔はな、わしもな、口荒らして、つらい思いさせた思う……。

浩次のかすかな鼻をすすする音。

一人仏壇の前で泣くようにお経を唱え始めた芳。

ふらついた足取りの靖が日本酒の瓶を抱えて店を覗いて、

靖 何？ 何？ どうしたあ？ まあ、飲みましようや、お二人

さん。ね。いや、でも、わかる！ ホント、この人は、昔から、せこい抜け駆けばかりしてるから。それは、確か。ね。

浩次 お前に言われとうねえ。

居間に上がってきた浩次が、仏間と居間の間の襖をすつと閉めて座り、目の前の日本酒をさつと飲み干す。

浩次 (改まって) あんな、二人共、いいか、聞いてくれ。おい、ちよつと、座れ。

靖 はい、何でしょう。

幸雄が酔った靖を制しながら、それでも二人でじゃれあうように座って、

浩次 おふくろも、いずれ居なくなる。家もじゃけど、墓んこともある。

靖 (だらしなく) あのーそれは、跡取りでしゅか？

浩次 それもある。

幸雄 後なら、翔一郎がおるが。なんだかんだ言っても、みんな出て行つて、ずつと一緒に住んでたんは、悟志兄さんと陽さんと翔一郎だから。

浩次 いずれはな、いずれは翔一郎が、継ぎあいんじゃけど。あいつもボンボンじゃ。

靖 はあ？

幸雄 ちよ、もう、おい。

靖 あんなあ、あんまり、人のこと馬鹿にしたようなこと言わんほうがええよ。

浩次 黙つて聞け、心配してるんだわしは。

幸雄 ああ、わかつてるつて。

靖 なあにを？ たまあに帰つてきて、こつちのこと何でもわかつたように。いつつもじゃ。

幸雄 おい。

浩次 親んこと心配して何が悪い。兄貴が先に逝つたから。

靖 ほら、あれ。この人、あれ、おやじが大事にした備前焼の壺、勝手に持つてつたんよ。この人。

幸雄 え。

靖 ほら、離れの床の間の。

幸雄 マジ？ 藤原啓のか。

浩次 あー、バカバカしい、もうええ、話にならん。

靖 あ、また、ごまかした。

浩次 おい、お前こつち居るんだから、今度、登記簿取つとけ。

靖 はあ？ 何、また、偉そうに。それが人にものを頼む態度かよ。

浩次 だから、必要なことじゃろうが。

靖 私は、壺はいくらになつたつて聞いてんの。

襖が開いて芳が顔を出す。

慌てる幸雄。

幸雄 靖、今日は、もうええわ。(二階に行こうと合図)

靖 (浩次を指さし) 結局心配なんは、自分らのことでしょうに？

浩次 なにを？

靖 (ふざけたかんじ) 私ら、分家ですから。

幸雄 (芳に) 大丈夫だから。

靖 (絡むように、浩次と幸雄を指さしながら) あんたらは、一旦は捨てたんだろ？ ここを。帰るたんびに、偉そうに東京や大阪の自慢ばかりしとったが。苦労話のつもりだったかも知れんけど自慢にしか聞こえんよ。

幸雄 わかったから。

靖 苦労しとんは自分らばかりみたいなこと言うて。田舎で、こつちで、生活しとるもんは、楽してる阿呆じゃぐらいに思ってたろ。……俺は、俺は寂しい。(だらしなく泣き出す。)

靖に絡みつかれて、あきれ顔、突っ立ったままの幸雄。

靖 暮らしてみればいい。ここの生活がどんだけ大変か。それにね、ふるさと、ふるさとって、どこに住んでも、一緒だから、東京や大阪の家がここに来るだけ。

幸雄 おい、もうやめとけ。

靖 はじめに、しかけたの誰ですか？ あん？ 自分の言いたいことだけ言って、逃げるんですか？ あんたら、嫌で出て行ったんだろ？

どこに住んでようが、みーんな働いて家族養つてる。仕事がつらいのは、東京だけじゃない。しんどいのは、兄貴らだけじゃなくて、

浩次 (大声) 勝手なことばかり言うな！

捨てたくて、捨てたわけじゃない！ わしに、どうせい言うんじゃ。悟志さんおつて、陽さんがきて。出て行かんで、どうせい言うんじゃ！ おう？ お前は、おふくろに小遣いの一つもやつとんか？ 大学の学費、兄弟の世話になつて。今まで、礼の一つ言われたことがねえ。えらそうに、わしに説教か！

座卓が音をたてる。

立ち上る浩次のステテコのすそに泣くように、すがる芳。

浩次の腕が靖の髪を掴んでゆする。

倒れこむ靖

芳 (悲鳴に近い声) やっちゃん！

靖の横に、倒れるように座り込む芳。

浩次の息が荒い。

靖 はは、ごめん、(畳に顔を擦付け) かあさん、はは、ごめんね。

幸雄 おい、もう。おい。

お互いの息遣いだけが聞こえて、

芳
浩ちゃん。

無視する浩次

芳
……浩ちゃん、わたしんせいじゃろうか？

浩次
だから、違うって。こいつがくだらんことを、

芳
須西の嫁のいうとおり、陽ちゃん。

浩次
は？

芳
このおばあさんが、昔、いじめたからじゃろうか。

顔を見わせる幸雄と浩次。

幸雄
どしたん、急に、

芳
……さっちゃん、浩ちゃんの目は、あたしんせいじゃから、

兄さんが持つてじやったから。

幸雄
ああ、ごめん。

芳
こん人、土手の彼岸花が、わからん言うて、泣いて帰って…

…もうなあ、（か細い泣き声）悪いんはみんな私じゃから。

やりきれない幸雄が、芳のすがるような目に居たたまれず、
座卓周りを片付け始める。

芳
おじいさんなんで早よ、迎えにこんのじゃろうか。生きとる

もんからも毛嫌いされて、逝ったもんからも来るな言われ
て。

浩次
誰もそんなこと言うたらん！

芳
陽ちゃん、逝くとき、私も一緒に連れっててもらえんじや
ろうか。

浩次
あんなあ。

幸雄
かあさん、もう。

芳
ほんとうにねえ、ありがとねえ、ようしてもらって。

みんな、ちゃんとした家があるのに。靖もあんたもわざわざ
ありがとねえ。

浩次
すこし、横になり、おい。

幸雄が、台所から持つてきたリング酢のコップを浩次に渡
し、

浩次
ほら、これ、好きじゃろ？ もうな、昔のことじゃ。なんも
かんも。

促され、座布団を畳んで、枕にし、畳に横たわる芳。目を
ぶる。

幸雄、押入れから、肌かけを出してかけてやる。
冷蔵庫にビールを探す浩次、冷えたビールがない。

酔いつぶれている靖。

芳の脇に座り、団扇で芳をゆつくり扇ぐ幸雄、機嫌悪く台所から戻る浩次に団扇を不愛想にバトンタッチ。

幸雄が靖を抱えるように、二階へ上がって行く。階段のきしむ音。

沈黙

芳 （目をとじたまま） 増え取ろう、しわ

浩次 なんや。（驚く）

芳 （溜息）

浩次 当り前じゃがな。つるつるしてたら気味わりい。

芳 あんた、いくつかな。

浩次 直に七十。

芳 ほうか、おおきゆうなられましたなあ。

浩次 ……かあさん、あんな、わしな、あんな、わしもな、かあさんがおらんかったらな……もう帰ってこん思う。この家。寂

しい、けどな。そうかいって、東京へあなた呼ぶんなあ。

……（溜息） 兄貴がおればなあ。

芳 浩ちゃん、

浩次 ん？

芳 行ってみるかな、……岸本。

浩次 ん、デイスサービスか？

芳 ふん。

浩次 ほう。

芳 浩ちゃん。

浩次 ん？

芳 本当は、もう、逝かせて欲しいんよ。一人おつても、

浩次 もう、いい加減にしてくれ！ すこし寝とき。休まれ。

深い溜息の後、居間の電気を消すと部屋は、靄がかつたブル
ー。

湿気を含んだ風と木々の揺れる音。

おもむろに立ち上がる浩次。

一人、家の中を見回し、深刻な面持ち。

店の外、ポストを見にでる。取り残された夕刊と本の茶封筒
に気づく。

やっと点いてる外灯の灯りで、

浩次 月刊「楓短歌会 6月号」。陽さんのか。

居間にあがると夕刊と一緒に座卓にそのまま置いて、縁側か
ら庭を見やる。

開けっ放しの縁側から、蛍が一匹、暮れかかる部屋の中を浮
遊する。

浩次 おう、はあ、飛びよるが今年は、早いもう。

サンダルをつつかけて、庭に降りていく。

居間に一人横たわる芳、寝がえりをうち深い寝息。

誰もいない台所と店。

サッシからの風がレースのカーテンを揺らしている。

庭もその先の川土手の木々も、芳のいる居間からすべてが繋がっている。

間

蛍が、芳の周りを浮遊する。

風でレースのカーテンが揺れる。

一人居間へ上がってきた悟志、電氣をつける。(白っぽい服装、亡くなる前六十才ぐらいの風貌)

悟志
かあさん。

芳
はあ、悟志かな。(寝ぼけ眼で、ゆっくり起き上がる) お帰り、早かったんじゃないあ、今日は。

悟志
こんなところで寝たら、体壊すよ。

芳
ふん、浩次は？

悟志
土手に出て、蛍みとる。

芳
蛍？ もう、出とんかな。えらいせっかちな蛍じゃな。

悟志
今夜は蒸すけん、蛍も我慢できなかったんじゃないやろ。そんなに、なあ？

芳
なん？

悟志
生き急がんでもええのになあ。

芳
生き、急ぐ？

悟志
しっかし、浩次も年取ったんなあ。さつきすれ違った時、わからなかった。土手に立つてる後姿が、おやじにそっくり

で、浩次ってわかったわ。

芳
ふふ、あんたもそうじゃが。

悟志
そうかあ？ わしは、違うだろ。おやじよりはいい男だと思うけどなあ。

芳
おとうさんもあんたも、ここらじゃ有名な二枚目なあ。学校行く汽車でようけもらつとったが、ラブレター。ほれ、あの、かみの弁当屋の小林の娘が、あんたに熱上げて、頼みもせんのに弁当持ってきて。ようもあんな不細工な顔して図々しい子じゃったが。なあ。

悟志
もう、かあさん。

はにかんだ様に笑う悟志。

肌がけを押入れに入れて腰を伸ばしたり、背伸びをする芳。

悟志
相変わらず、かあさんは、元気じゃな。

芳
なんか今日は体が軽いは。

悟志
ふーん。

芳
なんか、急に若返ったみたいに、背中がしゃんとしとる。

一人ウキウキした様子の芳。

鼻歌を口ずさみ、台所へ立ち、忙しくしだす。

静かに見守る悟志。

雑多においてある座卓上の夕刊を広げながら、

悟志 五月じゃゆうのに、もう梅雨に入るんかなあ。

芳 ほうじやろうか。

悟志 陽は？

芳 さあ、おらん？

悟志 うん、わしにや、姿がみえん。

芳 ふーん。どこ行ったんじやろう。

悟志 実家にも、帰ってるんかな。

芳 (手を止め、気にいらない様子) 大原へか？

悟志 (ふっと笑って) もう、ええが、かあさん。

芳 ほおう？

悟志 たまには。

芳 そいでも、

悟志 陽にも息抜きがあるんよ。

芳 そいでも、

(悟志、芳の口調に合わせて一緒に)

「私しや、なんも聞いとらん。」

驚く芳。一人、愉快そうに、幸せそうに暖かく笑う悟志。

芳 (不思議そうに) どしたん。何がそんなにおかしいん？

浩次 いつも、そんなことばかり言うて。

芳 は？ ほうかあ？

悟志 ああ、ずーっと。

芳 そう？

悟志 そう。かあさん、いつも言ってた。

悟志と芳、二人顔を見合わせ

「私しや、なんも聞いとらん。」

芳 (はにかむように、嬉しそうに)

ほうか、いつも言うとか。

悟志 ああ、

風に揺れるレースのカーテンを少女のように、体にくると
巻き付けて、おどける芳。

芳 ほうか、ほうか、言うとか。

悟志 ああ、かあさん。もうやめえや。

芳 いけずなばあさんじやのう、ほんに、私は。

芳と悟志、顔を見合わせて、静かに笑いあう。

風に揺れるレースのカーテンが、二人の時間を推し進める。

悟志はサイズの茶封筒に気が付き、しげしげと眺める。

どこか寂し気な様子。

芳 はあ、あんた、なんか白い顔して、気分でも悪いん？

悟志 少し。……ああ、蛍はええなあ。

芳 え？

悟志 ほら、蛍。毎年、こうして姿見せてくれる。邪魔にならんように、静かに飛んで。うれしいような、哀しいような、そんな、なんか、

芳 はかないような？（にやりと笑って）あ、ちごとった、わたしや、歯がないじゃ。ほれ、総入れ歯！

おどけて、歯並びを見せる芳。
じゃれあうように笑う二人。

悟志 いつまでたっても、かあさんは、頭も口もシャンコラじゃな。

芳 こんだあ、シャンコラばあさんか。あんたも元気ださにやおえんよ。若いんじゃないから。

悟志 ああ、ほんとになあ。

芳 それ、陽ちゃんの。また来たん？

悟志 （茶封筒を眺めながら）ああ、楽しみにしとったもんなあ、これ。

芳 毎月、届いたら部屋に籠って、ずっと読んだろ。何でも、自分の分が、どこに載るかが大事らしいは。

悟志 そんなくせ、恥ずかしがつてなかなか見せてくれんで、ほんにあいつは、いつつも……仕事辞めさせて、短歌が生きがいになつとったからなあ。どこ行くんにも、メモ帳と鉛筆、離さなんだ。

芳 その、楓の会の、ほれ、あつこに飾った、賞もうた時、あれは見せてくれたんよ。

悟志 ああ、嬉しそうだったなあ。本当にうれしそうだった。

鴨居にかけてある表彰状を見上げる。

悟志、立ち上がり、本棚から陽の自費出版した歌集を取りだし、丁寧に表紙をなでる。

「草の家」

中をみたり、匂いを嗅ぐそぶり。

付箋のページを開けて、

悟志 「ふるさとの川土手の柿たわわにて 草の家には人影のなし」

芳 表紙だけなら、与謝野晶子にも負け取らん、りっぱな歌集。

あんたも、よう、してやったんじゃ、

悟志 退職金があつたけん。賞もうたお祝いじゃ。

芳 そりや、誰でもしてもらえるもんじゃないけんあ。あんな、喜んで、まあ。仏さんにもあげまして。子供みたいに何

回も眺めて。みんなに配って。

悟志 抱いて寝よつた。

芳 あれまあ。

浩次 わしが、もとおらん（甲斐性がない）け。苦労かけた。

芳 お嬢さんだからなあ、陽ちゃんは。

悟志 ほんまは、わしんとこ来るような女じゃ、無かつたんよ。社長秘書だったけんな。陽は。社長の通訳しよったんじゃけな。

芳 そんな話は、ようけ聞かされとる。女子大の英文科出た、お嬢様で、こげな田舎に嫁がせるんは、かわいそうじゃ言うて。大原のおばあさんから、何回嫌味言われてきたか。

悟志 そいでも、あんだけ偉そうに言いよった大原の醤油屋は、今じゃのうなつて、こんばかり屋は、まだこうして続いとる。家は、とつくに開店休業じゃが。陽が来た時からずつと。

芳 そうかもしれんけど。ここらじゃ、知らんもんはおらんよ。昔は、手広くやつとったんじゃけん。おじいさんが、体壊して、あんたらも「はかりや」やこ先がないって。そいじゃから、今じゃ、

悟志 こんな大人数の家に、ようきてくれたんじゃ。大きいばあさんと病気の父さん、かあさんと、下に弟が三人も居るところに。

芳 昔は、それが当たり前よ。

悟志 工場長から、話もうた時、絶対わしやこ、断られる思うた。わしに、女子大出の嫁さんなんぞ、想像できんかった。あいつ、わしが学歴のこと気にしとん知つとつて、同窓会や

こ、なかなか行かんて。行きやええのになんだかんだ理由つけて、

芳 そうかな、そんなことがあつたんかな。

悟志 苦労かけたあ思う。それなのに、わし、なかなか、やさしゅうしてやれんで。照れくそうて、一緒になつた時分は、あいつの方が、給料良くて……なんやかや言われて、わし、今更、もうええが。

芳 今更、もうええが。
悟志 今月のこれも、早よ見たいだろうに。また、陽の歌が巻頭に載つとるかも知れん。

封筒を開け、中の冊子をだそうとするが、思いとどまる悟志。

封筒を大事そうに座卓に戻す。

芳 じき、ご飯せにやいけんのに、陽ちゃん、まだかな？

悟志 台所に行き、何やら探し出す。棚の扉を開けたり閉めたり。

芳 どうしたん？ 何探してるん？

悟志 うん、砥石どこじやったかな？

芳 砥石？ 上ん棚にあらう？

悟志 ここか。

芳 どうしたん？

悟志、流しの上の棚から、砥石、下の棚から出刃包丁を出して研ぎだす。

芳
急にどうしたん？

悟志、真剣な眼差しで、包丁を研ぐ。

芳
陽ちゃんに頼まれたん？

悟志
……。

芳
悟志あんた。

悟志
怖いって、言いよったけん。陽、これだけは、自分じゃやうせんって。

芳
何で、急に。魚でもおろすんか？

悟志
この出刃も、そろそろ限界じゃ。危ないんよ。これを研ぐんは、氣いつかう。ひよっと、手え切ってもなあ。毎年、正月用のブリ、おろすんは、わしの役目じゃし。

芳
あんた、まだ、夏も来んのに。

悟志
もう、できんから。

芳
え？

悟志
しといてやりたいんよ。あいつ、不器用だから。しといてやらんと。怖がつてようせんから。

芳
え、あ、手、氣いつけええよ。

悟志
ああ。

芳
陽ちゃん、早よ帰ればいいのに。

悟志
かあさん、陽は、もう帰らんよ。きつと。

芳
え？

黙って、研いだ包丁を、大事そうに棚にしまふ悟志。
引き出しから風呂敷をだし、鴨居から表彰状の額を取り外し、歌集と一緒に包みながら、

悟志
あいつ、帰らんかも知れんけど、わし、氣がかりじゃったけ。

芳
悟志、あんた、何しとん。どうかしたん？ 具合悪いんじや。

悟志
わし、もう行かなきゃ。

芳
行くって。

悟志
かあさんも行けばいいんよ。

芳
どこに？ 行くってどこに行くんよ、ちよつと悟志。

悟志
わし、もう、ここにはおれん。かあさん。

芳
なんよ。

悟志
かあさんも、自分の行きたいとこに行けばいいんよ。

芳
自分の行きたいところ？

悟志
ああ

行きたいところって言ってもなあ…（急に足を引きずり）
あたしや、足もこげじゃしなあ。

悟志 人はみんな、どこにでも行ける。あるじやろ人はみんな行きたいところが。

悟志が、届いた茶封筒（陽の短歌会冊子）も風呂敷に包もうとするが、それを風呂敷ごと芳が奪いとって、

芳 悟志あんた、ちよつと。

悟志 ごめん、かあさん。

芳 （声が震える）そうさなあ、こ、こ。 あたしは、ここ、うん、こん家がええ。あんたと陽ちゃんと翔一郎と、盆や正月には、浩次夫婦も幸雄も靖んともみんな帰って、たのしいうやつて

悟志 あー、そうかあ。楽しかったなあ、昔は。みんな、こん家に集まって。

芳 私はこん家がええ。こん家にまたみんなと一緒に暮らしたい。

悟志 みんな？

芳 だから、悟志あんたも。な？ どこにも行かんで、こん家に居って。な？ お願いだから。じきに、陽ちゃんも浩次も翔一郎も、幸雄も靖も、みーんな戻ってくるけ。いけずはせんけ。優しゅうするから、お願いだから、悟志ここに居って。

みんな帰ってくるから。（細く消えそうな声）お願いじゃから

：

悟志 かあさん、またそんな、夢みたいなこと言うて。

芳 夢やこ、……みとりやせん。

芳の手から、風呂敷を取って

哀しそうな笑みを浮かべ、立ち去りかける浩次、芳の方を振りむいて、

悟志 これ、陽に持って行ってやるは。あいつの宝じゃから。わし

があいつに。これだけは、あいつ本当に喜んで。

芳 悟志、あんた知つとん？ 陽ちゃんおるとこ。

黙ってうなづく悟志。

悟志 かあさん、浩次に言つといて、無理するなつて。

呆然と立ち尽くす芳。

蛍も消え暗闇。

● 第四場（7月半・悟志の三回忌の後）

仏壇の前には、いつになく沢山の御供。

店先にロードバイク。

セミの声 午後の強い日差し。

居間では、浩次がステテコ姿で、くつろいでいる。

テーブルには、お膳を広げた名残り。

喪服のままの翔一郎と昌枝が上がってくる。

翔一郎 暑い、暑い、暑い。

昌枝 ああ、もう、いや、ほんと、いや。

浩次 おう、ばあさん、機嫌よう行ったか。

昌枝 いいわけ無いでしょ。全く！

翔一郎が角を出す素振り。

昌枝 転びそうだから、支えたのに、いらんって手はねられるし、

座らそうとしてもすっごい力で抵抗して。「子供扱いすな」っ

て。そのくせ、ヘルパーさんには、にっこにっこして。お金

なんか渡そうとするんよ。

浩次 渡すふりして、もらっときやええが。

昌枝 （あきらかに悪意をもって芳の真似）「いつも、やさしゅうし

てもらってるのにお中元もとらん聞いて、気が利かんで、

すみませんねえ」

浩次 ほお、外面いいからなあ、藤井のもんは。

昌枝 （再び芳のまね）「今日は、長男の三回忌で、嫁は患うとる

し、自分がおらにやことが進まんだなあ」もう、大変だった

んだから。嫁が全部悪いんだって。全部。もう、いや、次は

絶対行きません。気が利かないもんで。

浩次 ふ、

翔一郎 昌枝おばさんは、本当に良くしてくれてます。倉田のご実

家からも御供いただいたて。本当にすみません。（頭を下げる）

昌枝 やめてよ。兄も気にしてるのよ。違うの、翔ちゃんに言っ

るんじやなくて、この人よ、自分の親なんだから。

浩次 もうやめ。次はわしが行っちゃる。

昌枝 へえ。

翔一郎 ホント、あれじゃヘルパーさんもタジタジじゃ。幸雄おじ

は？

浩次 このくそ暑いのに、靖と川行つとる。

翔一郎 ハエかな、もつと日が陰らにや、釣れんじやろう。法事に

殺生か、ばあさんいたらやかましいぞお。

浩次 知らん。

翔一郎 何怒っとん？ 怖い顔して。

浩次 お前は、一人息子でええな。

翔一郎 なんのこと。

浩次 男兄弟言うんは、ようねえ。

翔一郎 はあ？ また、やったん？ 坊さん居た時は、なんとも無

かったが。

昌枝 全く、お兄さんの三回忌だつてゆうのに。やっと、三人そろ

ったのに。お酒が入って、お寺さん帰ったらもう。

浩次 わし、一人阿呆みたいじゃ。おふくろのことが無かったら、
こんなことになりやせん。

翔一郎 ひでえな、ばあさんに早よ逝けつてことか。怒るでえ、聞
いたら。

浩次 おい、知つとつたか？

翔一郎 何。

浩次 幸雄、陽さんとメル友らしいぞ。

翔一郎 ああ。

浩次 知つてたんか。

翔一郎 喜んだ。おかしいの送つて来るらしい。メールみてよく
笑つてる。

浩次 前からか。

翔一郎 うん。砂丘で逆立ちしてる写真送つてきてた。もう、笑つ
たわ。

昌枝 何それ、見たーい。

浩次 つまらん。

翔一郎 おやじ死んでから、時々心配して連絡くれて。お袋も可愛
いみたいよ。今でも。

昌枝 さっちゃん優しいところあるもんね。

翔一郎 よく聞かされるんが、若い頃、おやじと喧嘩して裏の土手
から川見てると、幸雄おじが靖さんの手ひいて、泣きながら
来てくれたんじやつて。飛び込むと思つて。心配して。

浩次 ふーん。

昌枝 まあ、そおう。

翔一郎 幸雄おじが丸坊主で、学ランで、靖さんはランニングシャ
ツで。二人共はだしで来たらしいわ。で、自分も気が付いた
らはだしだったつて。

昌枝 まあ、やだ、可愛そうに、よっぽど、お義姉さん（かすれ
声）

翔一郎 どしたん、はは。

昌枝 あー、もう、ほんと、なんか、やだ。

思わぬ自分の涙に驚きながら、ティッシュで鼻をかむ昌枝。

浩次 あほか、お前。

昌枝 あなたには、わからないでしょ！

翔一郎 いや、お袋も何があつたとかは言わんのよ、細かいこと
は。でもそんな時は、それで、思い留まつたつて。

昌枝 ほんと、ねえ、ほんと色々あつたもんねえ。この家、ほんと
大変。（浩次に当てつけ）

ステテコのまま一人縁側へ逃げ出し、外を眺める浩次。

釣りをしている弟二人の様子も気になるらしい。

翔一郎 急だったから、一度、本当に、うん、盆には、帰してやり
たいんよ。なんとか。

昌枝 残念だったねえ、今回は。でもまた、ね。大丈夫よ。

翔一郎 ……なんか、最近、大分、痩せて。

昌枝 そうかあ、しやうがなかったわよ、今日も暑かったもんねえ。お墓。

翔一郎 輸血の回数も減って、あまりしてくれなくなってきた。

昌枝 良くなってきたからじゃないの？

翔一郎 いや、回復の見込みのない輸血は、厚労省からストップかかるらしい。

昌枝 何それ？

翔一郎 我慢強いのも、考えもんで。痛いとか、苦しいとか、もつと言ってくれたら……本当にあの人、

昌枝 ん？ 何？

翔一郎 実は、本人は今日、坊さんに、戒名頼むつもりだったみたい。

昌枝 え、

翔一郎 考えたくないけど、ね、なんか、あの人、もう、覚悟、（声がつかまる）

昌枝 翔ちゃん。

翔一郎 あんた、頼んできてって、俺、ふざけんなって怒って。まだ居ってもらわんと、俺、孝もやっと、学校……

（涙を必死にこらえて）ああ、本当に、おばさん、俺、まだ

何もお袋に、子供ん頃から、ずーっと、

昌枝 えらいねえ、（泣き声）翔ちゃんもお義姉さんも。

翔一郎 （泣きながら、溜息）親不幸してきたから……。

肩を落とす翔一郎の背を撫でながら、

昌枝 お義姉さんも気にしてるだろうから、早く報告してあげたら？ お盆には、帰れるって。ね大丈夫。

翔一郎 うん、盆に親父が帰ったら、まだ連れてくなくてよう頼んでもらわにゃいけん。

昌枝 そうよ、こんな立派な息子が待ってるんだから。

翔一郎の背を愛おしそうに撫でる昌枝。
縁側から浩次が、能天気な様子で戻る。
慌てて取り繕う翔一郎と昌枝。

浩次 まあ、やれやれじゃな。これで一つ片付いた。次は盆か。お

前も陽さんや、ばあさんや大変じゃな。今日は泊まるんか？

翔一郎 あー、いや、光子たちが買い物から帰ったら、病院よってその足で帰るわ。明日早番だから。

浩次 そうか。

翔一郎 まあ、おじさんたちが、五月に、ばあさんの施設の段取りしとってくれたから助かったよ。ほんとお世話になりました。

浩次 わしら、暇人じゃから。幸雄はもつと暇人じゃ。使えばええ、言っといたから。ふらふらせんと、こっちに居ってばあさんの世話せえって。

翔一郎 それでけんかしたん？

昌枝 居ない時は、気になってしかたないくせに。

浩次 ほんとにあいつら勝手なことばかり。

昌枝 もう、今晚は呑まないでよ。さっちゃん今日泊まるんだから。なんかあったら翔ちゃん来てよ。

翔一郎 まあ、事件だけにはならないように。僕が事情徴収せにやいけんくなる。勘弁して。仕事増やさんで。

浩次 阿呆か。知らん。

光子とアイスを食べながら翔一郎の子、孝が入ってくる。

孝 ただいまあ。

光子 帰りましたあ。

孝 おつきいばあちゃん帰ったよお。見て、アイス。

光子 もう、言うこと聞かなくて、帰ってからって言ったのに。

孝 だってね、溶けてきちゃうでしょ。

昌枝 おかえりい。いいねえ、おいしそう。光子さんごめんなさい。買い出し頼んじやつて。

光子 いえいえ、スーパで涼んできちゃいました。

孝 おつきいばあちゃん？

浩次 知らん。おつきいばあちゃんは、ちいっちゃくなつてどっか行った。

昌枝 もう。ねえ、おつきいばあちゃんは、病院帰っちゃった。

孝 えー、おつきいばあちゃんも、病氣なん？

昌枝 ねえ、どうしたんでしょねえ。元氣だったのにねえ。変で

すねえ。

浩次 おい、川行ってみろ、おじさんたち釣りしとる。

光子 あ、いえ、もう。

孝 パパ、川行きたい。

光子 だめ、もう帰らなきや。

孝 えー。

翔一郎 川はまた今度。陽ばあちゃんとこ行かなきやな。

光子 すいません。

浩次 そうか。

昌枝 ごめんなさい、忙しいのに。

光子 いえいえ。

翔一郎 さあ、じゃあ、忘れもんじゃないか？ 帰るぞ。陽ばあちゃんにお顔見せてあげようね。待つてるから。

孝 パパ、あれは？ 陽ばあちゃんのお歌の本は？

翔一郎 あ、そうだ、お前、えらいなあ。パパ忘れとった。

孝 もう、パパ、すぐ忘れて。

大きく息を吸い込んで得意げに孝がたどたどしく陽から聞かされて覚えた短歌を誦んじる。

孝 「病得て 知る子や孫の優しさを 我晩年の宝となさむ」

この孫はね、僕のこと。本に載るんだって。ね、ママ。

皆驚く。

翔一郎が、あわてて陽の短歌の冊子を探しだし連鎖してみんな慌てた感じで探し出す。

浩次 おい、わし、どつかで見たぞ。茶色の封筒に入っとるやつ。

昌枝 あの、ほら、前回来た時の6月号は、もう届けたんでしょ。

翔一郎 それが、ばあさんに聞いても見つからんで、まだなんよ。

昌枝 えー、お義母さんに言つといたのに。

孝 6月号は、陽ばあちゃん持つてるよ。

翔一郎 そうか、そうだっけ。

孝 7月持つてきてつて。8月も来てたら一緒に、

翔一郎 あった、これだ。ばあさん仏壇の中あげましてるが。

昌枝 早く持つて行つてあげなくちゃね、孝君えらいねえ。

茶封筒を渡されて胸に抱える孝、得意そう。

孝 いい歌が出せたんだって。

昌枝 そおう、楽しみだねえ。

孝 鉛筆、看護婦さんが削ってくれるんだって。僕、切手、貼つてあげた。

昌枝 そおう。

孝 陽ばあちゃんね、ずーっと、ずーっと生きてきたんだって。

まだまだ、頑張るんだって。ね！

翔一郎 そう、孝、運動会に呼ぶんだろ？

孝 うん！

昌枝 そおう。すごいねえ。でもね、ずーっと生きてきたのは、このおじちゃんも一緒よお。

ステテコ姿で、大あくびの浩次。

昌枝に笑いかけられて苦笑いの翔一郎夫婦。

孝 うん。ずーっとね。でね、陽ばあちゃん、今がね、一番しあ

わせつて、言つてた。ね、ママ。

光子 ……。

顔を見合わす浩次夫婦。

光子 あ、なんかね、そんなこと、……。変ですよ、今が一番、

て…。

みんななんとは無しに、気まずい感じ。

それぞれに帰る準備や台所で。

翔一郎 さあ、じゃあ、今日は帰るは。おじき達によろしく言つと

いて。しばらく居るんでしょ。

浩次 まあ、そうなあ、わしらと幸雄は、暇じゃしな。ゆっくりして

て行くは。ばあさんとこ行ったり、陽さん見舞ったりな。盆

まで居つてもいいけどなあ。

翔一郎 すんません。色々。また、連絡します。

浩次 どうせ、東京帰っても、だーれも寄り付かんし、顔見せりや、金目当てじゃし。

翔一郎 もう、そんなこと言うから余計、

昌枝 本当にねえ、こういうところがねえ。

翔一郎 おじさん、これからは、可愛い年寄りだから。頑張れ。

浩次 あほくさ。

昌枝 (顔をしかめて) ムリムリ。ふふ、じゃ、お義姉さんによる

しくね。私達、明日、行きます。

光子 すいません。失礼します。孝、

翔一郎 じゃ、ほら。

孝 ばいばい。

昌枝 ばいばい。

外でなにやら声がする。(以下 舞台上では見えず)

帰りがてら川から戻った幸雄と靖と挨拶している翔一郎。庭の井戸で、幸雄と靖が、釣ってきたハエを処理します。

縁側から、その様子を見ている昌枝。

昌枝 釣れた? ふふ、すごいじゃない。それ笹?

庭からなにやら、声がする。

昌枝 その井戸まだ使えるんだあ。

浩次が縁側へ来る。

二人並んで、庭を見ながら、

浩次 (喪服の昌枝に) 早よ、着替えてくりやええが。暑苦しい。

昌枝 あんなことするんね。ほら。お腹出して、へえ、エラから笹をさしてぶら下げてる。ふふ。

浩次 (縁側から大声) おい、しっかり腹だして洗うとけ。焼いて酔で食うぞ。

昌枝 はは、あんなに。(庭に向かって手を上げて) すごい。

……楽しそう、あの二人。

間

昌枝 靖さん、定年したら、恭子さんの実家、手伝うんだって。

浩次 ほおう、工務店をか。

昌枝 うん、同居するみたい。恭子さんが言ってた。

浩次 ……そうか。

間

浩次 土手の銀杏、切ったんじやな。

昌枝 うん。須西のおじさんが、市に言って、切らせたんだった。

浩次 ほう。

昌枝 お義母さん、文句言ってた。あの木、立派だったもんね。真
っ黄色になつて。

浩次 ふん。

昌枝 あなた、ギンナン拾うのが、好きだったもんね。

浩次 わしは、ああゆう、貧乏くさい感じが、症におうとる。

昌枝 あれ、井戸の向こうの壁。あんなに崩れてたっけ？

浩次 ん？

昌枝 直す？ 通りから見たら結構、目立つんじゃない？

浩次 そうなあ、

昌枝 みつともないよねえ。

浩次 ああ……。

昌枝 業者頼む？ どうせなら、

浩次 ああ、まあ、もう、……えかろう。

昌枝 ……。(庭に向かって) もう、入ったら？ (手を上げる)

間

昌枝 お父さん……土手の草刈ってあげたら？……幸雄さんと二人
ですれば？……二人共、暇なんだから。

間

昌枝 このままじゃ、この家、草に、埋もれる。

間

昌枝 私たちも一緒に埋もれそう。

間

浩次 陽さん……盆までもつか。

昌枝 ……。

浩次 あの土塀、子供ん頃、親父がしたんよ。覚えとる。

昌枝 ふーん。

浩次 町内の連中たのんで。なんか知らんが、うれしゅうて……な
んか知らんが。

昌枝 お義母さんも？

浩次 大きい声でよう笑つて。バラ寿司せつせと作りよった。

昌枝 ああ、評判よかったもんねえ。

浩次 ああ(深い溜息) 土塀、親父、悟志さん……銀杏の木か。

間

浩次 一つずつ、亡くなっていく…… 大事なもんは……。

店の外に人影。

薬屋 ごめんください。ココ薬品ですがあ。

完